広報つるが　令和5年1月号
No.971（令和4年12月13日発行）

つるがで輝くあの人を紹介

まちのキラリびと

東海市研修職員
金（キム）　相圭（サンギュ）　さん

▲市長への帰国挨拶

研修の様子

▲下水道工事立会いの様子

▲公園遊具点検の様子

敦賀は私の日本の故郷

韓国東海市の姉妹都市である敦賀市で、5月24日から11月23日までの約半年間研修させていただきました。

山・海・里と風光明媚な敦賀市は、雰囲気がどこか東海市と似ていることから、第一印象として親近感がわいたことを覚えています。

研修は観光部から始まり、都市整備部や産業経済部、教育委員会など様々な分野で実習しました。

技師である私にとって印象に残った研修として、建設部では大雨災害で被害を受けた現場の確認や消雪施設の点検、水道部では、下水道工事の現場立ち合いに随行しました。これまでも日本の土木技術を勉強してきましたが、実際に現場を見ると、日々発展している分野だと改めて感じました。

業務以外では、釣りやバドミントンを通じて、市民の方々と交流を深めることができました。

研修で学んだ知識や技術を東海市で活かし、土木技師として研鑽します。また、東海市と敦賀市が今後もよりよい関係を続けていくために両市の懸け橋になるよう努力します。

最後に、敦賀市職員の皆さんや日本語教室の先生をはじめ、市民の皆さんにとても親切にしていただきました。ありがとうございました。

まちの宝を発見！

つるが歴史遺産

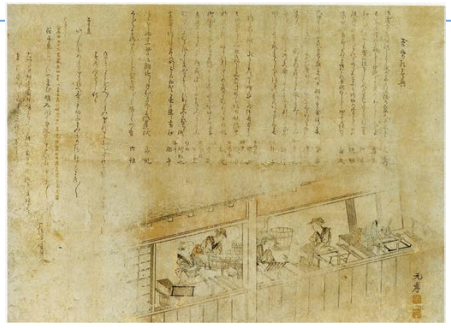
御手洗川は今も氣比神宮の南と西側で見られます

案内人　学芸員　加藤 敦子

内海元孝筆「紙漉図」

基本情報

種別：敦賀市指定文化財
所蔵：八幡神社



敦賀も和紙の名産地だった

全国的にも有名な越前和紙の産地として今立郡五箇が知られていますが、かつて敦賀も和紙の名産地だったことはご存知でしょうか。

敦賀の地誌『敦賀志』（1850年頃）の「紙屋町」の項に、「氣比宮御手洗（みたらし）川の流れに着て此処に住り、よて町名となれり。此紙此水にあらざれバよからずと云」と記されているように、氣比神宮のそばを流れる御手洗川付近にあった紙屋町（現元町）内には、紙すき屋が集まっていました。敦賀半島では良質な雁皮が採れ、それを原料に製造された敦賀の「鳥の子紙（とりのこし）」は、永平寺に500年にわたって納められたと伝わっています。明暦の大火で被害を受けた江戸城普請の際には、小浜藩主が敦賀の紙1万5千枚を献上しました。また、小浜藩米手形（藩札）にも敦賀の鳥の子紙が採用されました。京都西陣織の金箔原紙としても利用され、敦賀の和紙が広く求められていたことが分かります。近世に繁栄を築いた敦賀の鳥の子紙は、藩札の廃止や西陣の不況、洋紙の普及などによって明治に製造を終えました。

江戸時代の敦賀の画家・内海元孝（うつみげんこう）による「紙漉図（かみすきず）」には、工房で紙をすく人たちの様子が描かれています。紙の材料の性質上、寒さの厳しい冬にすくと良い紙ができることから、「紙は寒漉（かんす）き」と言われます。紙屋町の職人たちも、冬の御手洗川を流れる冷たい水に耐えながら、名産である敦賀の鳥の子紙をすいていたのだろうと想像します。

広報担当者のつぶやき

私事ですが先日入院しました。短い期間でしたが、長く感じたことが印象的です。体の悲鳴。自分は感じてなかったのですが。M氏をはじめ、職場の皆さんのやさしさが身に沁みました。まずは治療に専念！
最近はストレッチや健康に関する動画を見あさってます。（T）

年の瀬が押し迫る中で作成した今号。共に広報紙をつくるT氏が復帰し、なんとか発行できました。19頁には、高校生がインターンシップで広報業務を体験した様子を掲載。一生懸命に取材や記事作成を行う姿はまぶしいくらい輝いており、何事にも恐れずチャレンジする姿勢を見習わなければと思いました。（M）

広報つるが
発行：敦賀市　編集：秘書広報課
印刷：若越印刷株式会社
〒914-8501 福井県敦賀市中央町2丁目1番1号
E-mail kouhou@ton21.ne.jp
TEL 0770-22-8112 ▼ FAX 0770-22-8170

●広報つるが　毎月第2火曜日発行
●行政チャンネル（RCN 091ch）
毎日6時～24時放映（週3回入替）
●市政広報ラジオ（敦賀FM放送 77.9MHz）
平日4分番組・12回放送
●HP https://www.city.tsuruga.lg.jp/